

## 『<sup>こ どう</sup>孤道』 完結編発売

内田康夫の小説『孤道』は本人の希望により 2017 年 5 月に未完のまま刊行。続きとなる完結編を一般公募し、2018年9月、最優秀作品が決定しました。受賞作は札幌市在住の和久井清水氏わ く い きよ みによる『孤道 我れ言挙げす』。和久井氏は高い文章力で、内田康夫が遺した数々の謎とテーマを的確に捉えて続きを書きながら、新たな物語として『孤道』を構築してみせました。地理的な旅や歴史的な旅を描き、人の心の奥底で揺れる小さな火種を掘り起こす展開は、内田康夫の執筆スタイルに通ずるものがありますが、この結末は内田康夫でさえ想像していなかったかもしれません。和久井氏には内田康夫の代わりに早坂真紀から、自費出版本の内田康夫デビュー作『死者の木霊』と、内田の直筆短冊〔孤影往く 熊野古道の 茜草〕が贈呈されました。この句は前号でもご紹介しましたが、内田が『孤道』執筆直前に詠んだ一句です。完結編の『孤道 我れ言挙げす (\*)』は2019年3月中旬、野想忌や そう きに合わせて、講談社から文庫判で刊行の予定。また、内田康夫の未完小説『孤道』文庫判も同時発売の予定です。

(\*) 刊行の際、タイトルは変更になる可能性があります。



左から早坂真紀、和久井清水氏、  
選考委員の山前讓氏